

はじめに——EPICソニーから遠く離れて

今、この本を手を取ったあなたは、あの頃、どんなふうにも、EPICソニーの音楽と接して  
いましたか？

\*

82年の秋。大阪市内の府立高校に通う高1の私が教室で佇たたずんでいると、渡り廊下の奥にある  
音楽室から、ピアノの音が聴こえて来た。

♪ソドレ・レミミレ・ミーシド・ドシドー

人懐っこいコード進行に乗る、とても流麗なメロディ。音楽室にある、古ぼけたスタインウ  
エイのピアノを弾くのは、合唱部にいた1学年上の女子の先輩だ。

さほど知り合いというわけではなかったが、数日前にラジオで聴いたことがあったメロディなので、思いきって尋ねてみた。

「その曲、何て曲ですか？」

「佐野元春の《SOMEDAY》っていう曲やで。めっちゃええやろ」

と、私はその曲を知らないことを、少しばかり小馬鹿にした感じで、もう一度ピアノを弾き出した。

♪ソドレ・レミミレ・ミーシド・ドシドー

「きれいなメロディですねぇ」

「右手の親指と小指を広げて、オクターブで鍵盤弾いたら、こういう音が出るねん」

先輩の細い指が奏でる、力強い、でも流麗なメロディが、高1の若々しい身体全体からだに染み渡り、私は、それまでの人生で感じたことのない、あるみずみずしい感覚に満たされていった。

佐野元春《SOMEDAY》とともに青春の扉を開いた、15歳の秋——。

85年の2月。高3の私は、大学に現役合格することを諦め、生徒会の一員として、卒業式に

向けた準備に精を出していた。

私の担当は卒業文集。3年間の思い出を綴った同級生の文章を集めて、1冊に編集する。当然、まだPCなどはなく、手書きの紙を切ったり貼ったりのアナログ作業だ。

思うように作業が進まず、生徒会仲間の家にみんなで泊まり込んで、徹夜で準備することになった。ある程度の目処が付いた土曜日の深夜。こたつに入ってウトウトしているときに、強烈なフレーズが、テレビのCMから流れてきた。

♪もうすぐ雨のハイウェイ 輝いた季節は

「わしづかみ」という言葉があるが、CMサイズの短いフレーズが、深夜、小さな部屋でウトウトする高3男子4人の心を、まるでギョツと音がするくらいに、わしづかみにした。

「ええ曲やなあ」

「耳に残るなあ。何ちゆう曲やろう」

画面の中では、外国人の少女がキスをするフリをしている。うだつの上がない男子4人、リアルなキスからたぶん縁遠かった4人が、それでも85年の春、人生の春を迎えに、ゆっくりと歩き出そうとしている。

大沢誉志幸《そして僕は途方に暮れる》とともに青春のピークを予感した、18歳の春――。

89年の夏は、どうにも調子が悪かった。

7月に就職も決まり、本来ならば自由を謳歌するべき最後の夏のはずなのだが、就職活動の経験が私をやわらかに縛り付けた。来年から大人の世界にからめとられることが、不安で億劫でたまらなかった。

下宿の室内アンテナ付きの小さなテレビをつけて、ビデオデッキのスイッチを入れる。画面に映るのは、E P I C ソニー系のプロモーションビデオが流れるテレビ東京の『eN』だ。センスのあるビジュアルで仕立てられたこの番組は、調子が出ない当時の私の息抜きには最適だった。

岡村靖幸の歌が流れてきた。

ちよっと前にラジオで聴いた《Vegetable》にひっくり返り、大学4年生の夏は、私にとって「岡村靖幸の夏」となった。アルバム『靖幸』は、歌詞を憶えるほど聴いたし、白状すれば、彼独特のダンスまでマスターしようとした。

♪ユカはたしかに美人だ 僕のヒップにしゃがんで

10型の小さな小さな画面の中で、岡村靖幸が《いじわる》という曲を歌い踊っている。実にエロティックに手をくねらせている。それを見て私は、来年のことなど忘れて、一瞬でも忘れようとして、画面を凝視して、岡村靖幸のように手をくねらせてみた。

岡村靖幸《いじわる》とともに青春の出口に踏み出そうとしていた、22歳の夏――。

\*

E P I C ソニーから遠く離れて。

思い返すと、私の80年代、私の青春時代には、E P I C ソニーの音が、いつも響いていた。ロックで、ポップで、おしゃれで、激しくて、東京っぽくて、そして何とんでもキラキラしていたE P I C ソニーの音。

なぜ、あの頃のE P I C ソニーの音は、一様に輝かしかったのか。誰がどのようにして、あの頃のE P I C ソニーの音を作り上げたのか。

洋楽に比べて、レーベルのカラーなど判然としなかった当時の邦楽シーンの中で、なぜE P I C ソニーだけが、キラキラ・イキイキとしたレーベルカラーを醸し出すことができたのか。

そして、なぜ、あれほど輝かしかったE P I C ソニーが、いつのまにか、遠い記憶の彼方かなたに消えてしまったのか――。

これらの謎を解き明かすことが、私の使命と勝手に感じ取ったのだ。50歳前後から、少しずつ本を出し始め、テレビやラジオに出始めた遅咲きの音楽評論家として。80年代のE P I C ソニーとともに、青春を過ごした世代の1人として。

「第一章 E P I C ソニーの『音楽』」では、80年代（一部70年代、90年代）のE P I C ソニーが量産した名曲30曲を取り上げて評論していく。歌詞、メロディ、アレンジの音楽的分析に加えて、その曲が生み出された背景や人間模様について、丁寧に、かつ大胆に描き出したつもりだ。

よくしたもので最近は、ここで取り上げたほとんどの楽曲を、サブスクリプション・サービスで聴くことができる。ぜひ、1曲1曲を実際に聴きながら、1曲1曲についての評論を楽しんでほしいと思う。

「第二章 E P I C ソニーの『時代』」は、E P I C ソニーの「歴史」と「意味」について、総論的に追った、言わば通史となっている。「株式会社E P I C ・ソニー」が、独特なプロセスで組成され、「ロック・レーベル」として80年代に栄華を極め、そして、ほとんどのリスナ

ーが気付かない形で消滅していた経緯や、その経緯の中で大活躍をしたE P I Cソニー最大のキーパーソンⅡ丸山茂雄の<sup>すじ</sup>凄みについて考察してみた。

最後は「第三章 E P I Cソニーの『人』」。佐野元春、大江千里<sup>せんり</sup>、渡辺美里<sup>みさと</sup>、TM NETWORK、岡村靖幸を生み出した、E P I Cソニーの伝説のプロデューサーⅡ小坂洋二と、佐野元春へのインタビューを掲載。現時点で、発言や資料がほとんど見当たらない小坂氏の言葉は、もうそれだけで貴重なものだし、また「E P I Cソニー史」視点の、かなり突っ込んだ質問を投げかけた佐野氏へのインタビューも、世に<sup>あふ</sup>溢れる氏へのインタビューにはない、特異な価値を持つものだと思ふ。

\*

21年3月13日の土曜日、東京は雨が強かった。地下鉄九段下の駅からの坂道を、濡れながら登って日本武道館へ——「佐野元春 & THE COYOTE GRAND ROCKESTRA 『ヤァ!』 40年目の武道館」。

この日は佐野元春65歳の誕生日。しかし、そんな年齢を感じさせないほど、エネルギーが続きが続いていく。

最後に歌われたのは《約束の橋》。個人的なこだわりを付け加えておくと、フジテレビのドラマ『二十歳<sup>はたち</sup>の約束』の主題歌ではなく、あくまでアルバム『ナポレオンフィッシュと泳ぐ日』の1曲としての、それである。

♪今までの君はまちがいじゃない

この本を手にとってほしいのは、まずは私と同世代、当時、キラキラしていたEPICソニの音とともに青春を過ごした人たちだ。

中でも当時、「つまらない大人にはなりたくない」という思いで「すべての『なぜ?』にいつでも答えを求めていた」若者だったあなたが、この本をきっかけに今一度、EPICソニが彩った時代の中にいる自分に立ち返ってくれれば嬉しい。

さらには、あの頃からの自らの歩みを確認して、「今までの私はまちがいじゃなかった」と肯定してくれると、心から嬉しい。そして――

♪これからの君はまちがいじゃない

EPICソニーから遠く離れた、この先の見えない時代、（佐野元春風に言えば）「うすのろ」のような老後に向かうポジティブなパワーを、この本から充填してくれるのであれば、そりゃもう、最高だと思うのだ。

\*

今、この本を手を取ったあなたは、あの頃、どんなふうに、EPICソニーの音楽と接して  
いましたか？

※なお、「EPICソニー」「CBSソニー」について、法人としての正式な名称はそれぞれ「EPIC・ソニー」「CBS・ソニー」となるが、本書では、法人名を表す箇所以外は「EPICソニー」「CBSソニー」と簡略化して表記することとする。